風姿花伝第三、問答条々

六　能に位の差別を知る事

（原註：この段をばのぞく）

問。能に位の差別を知る事如何。

答。これ、目利きの眼には易く見ゆるなり。凡そ位の上がるとは、能の重々の事

〔口訳〕

問。能に於ける芸位の差別を知るといふ事は如何したら良いでせう。

答。芸位の違ひといふものは、眼識の高い批判者には容易にわかるものである。一体に、芸の位が上るのは、能の段階々々を経て、次第々々に上るのが常であるが、不思議に十歳ばかり

なれども、不思議に、十ばかりの能者にも、この位自と上がれる風体あり。但し、稽古無からむには、自と上がる位有りとも、徒事なり。先、稽古の劫入りて、上の位の有らむは、常の役者にも、この位が自然に上つた風体を持つものがある。しかし、かやうに天稟的に上つた位があつても、稽古といふ事を疎かにしては、それは全くむだとなつてしまふ。まづ、稽古の年劫を積んで、その結果上位の位に到るといふのが、普通である。又、生得の天稟であがる位といふのはたけであつて、かさといふのは別のものなのである。所が大ていの人は、能に於けるたけとかさとを同じもののやうに考へてゐる。かさといふのは物々しく勢のある様子をいふのであり、又能以外に於

の事なり。又、生得上がる位とは、長なり。嵩と申は別のものなり。多く、申楽に、長と、嵩とを、同じ様に思なり。嵩と申は、物々しく、勢のある形、又、一切に渉る儀なり。位、長ても、かさといふべきものは、一切のものに渉つてあるものである。従つて、位やたけといふものとかさとは別のものなのだ。例へば、生れつき、幽玄な所のある者がある。これは生得の上位といふべきだらう。しかし又、少しも幽玄な所の無い役者で、たけのある者もある。これは幽玄ならぬたけである。又初心の人の注意しなくてはならぬ事は、稽古に於て、上の位をまねようと心がける事は、返す返すも出来ない相談である。位を心がけても位はいよいよ得られず、その上、今まで稽

には別の物也。たとへば、生得幽玄なる所ある、これ上の位歟。しかれども、更に幽玄には無き為手の、長の有るもあり。これは幽玄ならぬ長なり。また初心の人思ふべし。稽古に上の

古した分までも、下位に下つてしまふであらう。詮ずる所、位やたけの上るといふことは、格別の心得があるので、それを自得しなくては不可能といふべきであらう。しかし又、稽古の年劫を積んで、芸の垢がぬけきつてしまふと、この芸位といふものが、自然に出来て来る事がある。ここに稽古といふのは、音曲・舞・働き・物真似等のいろいろの伎を究める所の型を学ぶことをいふのである。よくよく工夫し考へて見ると、幽玄の位は別伝のものであらうか。又闌けた位といふのは劫を積み極めた

位を心懸けんは、返々叶ふまじ。位は弥叶はで、剰へ、稽古しける分も下がるべし。所詮、位、長の上がらん事は、各別の心得ありて、得ずしては大方叶ふまじ。又、稽古の劫入て、垢

上のことだらうか。十分に心の中に工夫をめぐらして考へて見るが良い。

落ちぬれば、この位、自と出で来る事あり。稽古とは、音曲、舞、働き、物真似、か様の品々を極むる形木なり。能々工夫して思に。幽玄の位は、別伝の所か。長けたる位は、劫入たる所か。

心中に案を巡らすべし。

〔評〕 此の段では、能芸の位を論じて居るのであるが、それを、天稟自然の位と修練による位とに二大分し、それにたけ・かさ・幽玄等の諸項を連関せしめて説いて居る為に、一読して一寸要領を得ることはむづかしいかと思ふ。それで私の読み得た所を次にのべて見て、読んで頂く方々の御参考にし度いと思ふ。

先づ位には、天稟的なものがあるといふ。それには幽玄の位とたけが考へられて居る。天稟的に容姿がすぐれて生れ、優美な素質を持つたものは、天稟の幽玄の位であり、生れつき品格が高くて気高い所の持主はたけ高き天稟の者である。これ等の恵まれた者は、幼少でまだ十分の稽古もつまない時代に於てすら、自然的に上位の風体を体得して居るやうに見られるのである。しかしながら、世阿弥の言に従へば、これ等は「時分の花」であり、一時的なもので、若しこれに稽古修行を加へなければ、折角のものも「いたづら事」となり終るものである。次に、修行鍛錬によつて出来上る位がある。これが順態（じゆんたい）の位である。修行の一

段一段を重ね重ねて、遂に稽古の劫によつて、垢をすつかり落し切つて、そこから生じる上位こそ、真の位である。闌けたる位は、かくして到達し得られるのである。

次に、幽玄やたけの位は、「天稟のもので、努力によつては到達せられないもの」とばかりは見て居ない点に着目すべきである。「幽玄の位は別伝の所か」といひ、「所詮、位たけの上らん事は、格別の心得あり、得ずしては大方叶ふまじ」といふ、その「別伝」「格別の心得」などの自得を説く世阿弥は、これを後に花鏡に於て、展開して居るのであ

る。ここでは、まだそこまでは明瞭に示して居ない。ただ「稽古の劫入りて垢落ちる」といふ語で以て悟らせようとして居る。

次に稽古といふことについて面白い表現をして居る事に目がつく。「稽古とは、音曲・舞・はたらき・物真似、かやうの品々を極むる形木なり」といふ一言である。形木は型であり芸の規矩である。この規矩に従つて、音曲や舞や物真似を極めるのが稽古なのであつて、規矩は稽古にとつて不可欠のものであり、又同時に、稽古の目標であるのである。稽古に於ては、この規矩、型以外のものを求める事は邪道である。この立場に立

つて、はじめて「稽古に上の位を心がけんは返々叶ふまじ。位は叶はで、剰へ稽古しける分も下るべし」といふ訓戒の真意が解し得られる。この句は、「稽古に際して、上位の芸境にならうと考へても、不可能だ云々」と解しては誤りで、「稽古に於ては、(目標は歌舞や物真似の規矩にあるので)、位などを学ばうとするのは、全く出来ない相談だ」と解すべきであると思ふ。「先づ型に入りこれを体得する、そして自然に上位に上る」、これが正道である。上位を得ようと位を模し学んで、型を疎にしては、本末顚倒となるのである。この注意は、至花道書の闌位の条に於て、更に鮮かに展開して示されてゐる。即ち、初心者が上手名人の

闌けたる芸を模倣しても、自分の実力に叶はぬものだから、結局似而非なる模倣に終り、さうした結果は、自分の今まで練習した型も崩れて、遂に全く邪道に落ちることとなるといふ訓戒がそれである。

最後にたけとかさの問題を見るに、たけは天稟的なたけもあるに比べて、かさには天稟云々の問題はのべて居ない。従つて、かさは稽古修行の結果自然に生じるものかと考へられる。池内翁の考もさうであるらしい。「物々しく勢のある形」とか「堂々たる威容」とかは、どうも錬磨をつみ場数を踏んだ結果でないと出来て来ないやうに思はれる。世阿弥の時代に、かさとたけとを多くの人々が同じものの如くに考へて居たといふのは、この両者の外貌に一味似通ふ所があつたためであらうかと思はれる。尚、たけと闌けたるとは、全く別のものであるから、混同しないやうに注意が望ましい。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著